Osaka University Knowledge Archive

Title	ターナー象徴論ノート
Author(s)	梶原, 景昭
Citation	年報人間科学. 1981, 2, p. 180-187
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9379
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ターナー象徴論ノート

梶原景昭

一昨年ヴィクター・ターナー来日の折、彼を大阪市内の神社仏閣に案内したことがある。とにかく神社や寺院を見たいという彼の希望にしたがって、まず天満の天神様を詣で、神殿の色彩のシンボリズムとか、日本文化における赤の象徴性などについてとりとめのない話を交わしていた。昼食をはさんで寺町と呼ばれる寺院の集中した地域の寺を訪れると、厳しい底冷えのする時候だったせいか、すぐさま境内の、離れて別棟になっている手洗いに「聖なる場所だ」といいながら彼が入っていった。出てきた彼は、寒肥の施された樹木をみつけ、一体あれは何かと尋ねた。樹木の根元をきっちりと同心円状に囲むように、硫安か何か化学肥料が撒かれていたのである。その問いに、単なる肥料ですと答えると、彼はいささかむっとした風に、そんなことは充分承知のうえだという調子で、あの肥料の色が白いことが大事なのだよといって急にニヤリとした。そこまでいわれて当方もやっと気がつき、白――ミルク――精液――豊穣性といった連想を思い起こし、単なる肥料に含まれた深い象徴性を考えさせられることになったのである。というといかにも大げさな話だが、象徴の小径の案内人ターナーは大真自面で、さらに来日中こちらをいささか当惑させた日本礼讃を始めるのだった。いわく、肥料さえもあのように繊細な注意を払って、美的に撒くとは。こうした挿話は、まさにシンボリストとしてのターナーの面目躍如といってもよい。ただしかつてターナーもその重要な一員であった、マックス・グラックマン率いる人類学におけるマンチェスター学派は、マリノフスキーが一つの恰好な例を典型的に選び出し、文化を記述するのとは対照的に、一連の社会状況を詳細に記述、分析してゆくという方法をとっていたのだから、一つの挿話だけですべてを語り尽くすつもりもないとの留保はつけておこう。

1

さてターナーの象徴論について語る場合にまず考えておかねばならないのは、彼は、いわゆる象徴をめぐる理論を理論そのものとして提出してはいないという点である。ほとんどの場合、彼の象徴観

は具体的な文化、社会のコンテクストにもとづく記述のなかに示されているといってよい。彼自身『ドラマズ、フィールズ、メタファーズ』の第一章の冒頭部分で人類学と理論との関係にふれ、「実際の社会生活の体験にもとづいて抽象的な概念を作り出し、知的記述を行なうのに際し私が辿る道は、ほとんどの場合ほかの人類学者が歩んできた道と重なり合う。われわれ人類学者はさまざまな理論をフィールドへひきずってゆくのだが、理論の当否といったものは、それが社会の現実を明らかに照らし出すかどうかにかかっている。」と述べている。事実、彼の立場は『象徴の森』にみられるように中央アフリカ、ザンビア北西部に位置するンデンブ社会の詳細な記述を出発点としており、コミュニタスや境界性の問題をより抽象的に扱ったそれ以降の著作においても、社会や文化の状況に関する記述のうちに象徴の問題を浮かび上らせるという方法がとられている。

他方もう一つ注目すべき点は、彼の研究が一貫して社会の動的な過程にむけられていることである。ターナーは『分裂と持続』において、中央アフリカの母系制社会が、母系集団の一員であり、そのため自分の姉妹と同一の母系集団に属する兄弟の立場をもち、また夫として妻の母系集団には加わることのない存在である一人の成人男子にみられる相反した利害をどのように調整しているかという問題にとりくんでいる。すなわち母系制と夫方居住を社会構造の特徴として備えたンデンブ社会には、構造に由来する不可避的な葛藤が含まれているのである。通常ンデンブ村落は、同一の母系集団に属す男たちを中心に形造られ、そこに他の母系集団からやって来た妻たちが住みつく。逆に男たちの姉妹はほかの場所へ婚出してゆくのである。ところが母系社会の原理が働いて、当然男たちの地位は姉妹の息子に受けつがれることになるわけで、そのため姉妹およびその夫と一緒に他処で居住していた子供がいわばオジさんの住む村に移ってこなくてはならない。しかし母系原理の要請とは対照的に、我が子を手許において後を継がせたいという家族的要請や親子関係という情動的な結びつきも存在しているため、そこに葛藤が生じる契機が色濃くみられるわけである。このため村落構造や婚姻にきわめて強い不安定性がみられるとともに、さらに加えて、母系リネージのなかで異った役割と機能を担う男と女とのあいだにも構造的な葛藤がみられるという。ンデンブ社会のような潜在的な葛藤と緊張に満ちた状況をふまえて、そうした葛藤がどう生じ、どのように解決されてゆくかを分析するために、彼は、「社会劇」という枠組と、時間の経過を含む一連の過程全体を包括した事例研究の方法を採用している。こうした社会過程、社会劇としていわば進行しつつある社会を動的にとらえてゆく方法は、その後の著作のなかに一貫して受け継がれてゆく理論的な枠組であり、巡礼、宗教運動などの研究に展開されてゆく。同時にそうした立場は最近ターナーが提唱する新しい人類学の試みとも軌を一にしている。すなわち構造、均衡、機能、体系といった概念から、過程、不確定性、反省作用という概念への移行を通じて、静態的な現在あるものを示す用語から、進行中のあるものに結びついた用語への変更がなされつつあるとの認識がそこに示されているのだ。彼の社会過程を重視する主張には当

然のこととして人類学批判が含まれており、その骨子となっているのが、シュッツに倣って、生活世界は文化によって構成されたものであるという認識で、こうした類型化によって形造られた意味世界はいわゆる自然科学的なモデルではとうてい解明できる対象ではないと述べている。社会過程にみられる構造と反構造としてもっとも典型的に示されるターナーの動的社会観は、彼の象徴理論の中心を占める考え方であり、自らの立場を「象徴と社会のダイナミクス学派」と位置づけている。彼は「象徴研究」というレヴューのなかで、自分の立場は、ゴフマン流の微視社会学、社会言語学、フォークロア、文芸批評、記号論に共有されるものであると語っている。それに対し構造人類学、構造言語学、認識人類学を中核とする「抽象的システム学派」を対蹠的に位置づける。こうした彼の立場は、言語学におけるパフォーマンス重視の方向に相当し、コンピテンスに重きをおく学派との一線を画すものといえよう。さてパフォーマンスと状況を基準に分析を行なってゆく象徴研究は当然ながら、シンボルの喚起力、起動力への関心に向かわざるをえないといってもよい。しかもターナー‖青木対談で述べられたように、シンボル研究そのものが現代社会の要請であるという対談者のあいだの共通認識に重要な意味が含まれているのだ。ターナーもいうように、「社会が自ら反省しはじめるときを除いては、人々はそれらの事象がシンボルであるとは気がつかないのです。そして、いったんそのときになると、社会で普通用いている言葉も事物も決して自然のものではなく文化の事実であるとみなしはじめることになる。こうなると、ド・ソシュールが示したように、〝意味するもの〟と〝意味されるもの〟との間に違いが生ずるのです。」との指摘がなされ、「シンボル研究自体がそうした反省作用の一環であり、社会や人間の相互関係の危機に際して現われるものなのです。」と語られる。

ではなぜシンボルの問題と社会のダイナミクスが結びつくのであろうか。そこには実際的な行為と象徴的な行為を一致させる糸口が示されているとターナーは言う。すなわち社会の動的な過程が両者を繋ぐ役割を果すというのだ。それは同時にシンボルを身体的、道徳的、経済的、政治的などさまざまな力を現実のものとする手段とみなすことでもある。ところでそうしたことは実際のンデンブ社会にきわ立ってよく見られることであり、そこでは社会的葛藤を解消する目的で儀礼が頻繁に行なわれ、そこに豊富な象徴が登場するのである。

2

ターナーは『儀礼の過程』第Ⅰ章で、文化研究に対する儀礼研究の重要性を指摘しているが、彼がンデンブ社会の調査に従事していた時代には儀礼が多くの研究者の注目をひく対象ではなかったという。事実彼も調査の初期には村落、親族、政治、生業など人類学調査の「常識」に関する莫大なデータを集めていたが、「自分はいつも外側からなかをのぞいているのにすぎないのではないか、という不安を感じていた。」と述べている。儀礼の太鼓が鳴り出すと、ンデン

ブの人びとはターナーを放り出して出かけて行ってしまう。そのためターナーは「ンデンブ文化の一部分についてすらも、それが実際にいかなるものであるかを知ろうとするならば、宗教儀礼についての自分の偏見を克服し、その調査を始めなければならないということを認めざるをえなかった。」という認識に達するのである。論文「ンデンブ儀礼の象徴」(『象徴の森』所収)でターナーは、シンボルを「儀礼のもっとも小さな構成単位」と定義し、実際にそれらは、「儀礼状況のなかで、事物や活動として、関係、出来事、動作、空間を示す単位などとして経験的に観察可能なものである。」と語っている。さらにそうした儀礼シンボルの研究は、ただ単にそれぞれの象徴をきり離して個別に対象とするのではなく、他の象徴との連関において「一定の時間の連鎖のなかで」行なわれるべきものとしている。ここにターナーの象徴理論の一つの出発点ともいえる過程の問題が浮かび上ってきているといえよう。しかも儀礼自体そうした社会過程の特異な局面(たとえば危機の状況)に行なわれ、社会集団は儀礼によって内的な変化や動きつつある外部の環境に適応することを試みるのである。そのため儀礼シンボルは社会的行為の要素を構成するものであり、行為の原動力となるといってよい。ターナーの象徴論はこのようにすぐれて儀礼と結びついており、しかも象徴の喚起力、あるいは動的な力が問題とされていることが了解される。そして彼は儀礼のコミュニケーション的側面を強調しすぎて、儀礼のもつ効力や威力を軽視していると言って、リーチの儀礼論批判を行なっている。

結局のところターナーによれば、シンボルは単に認知されるべき対象であったり、抽象的な問題にとどまるものではなく、人間行動をめぐる利益、欲、目的、手段との強い繋がりをもつものである。その意味でシンボルの属性として動的な力が強調されていることもきわめて自然だといえよう。

ところで儀礼シンボルの意味を研与する際に資料となるデータはどのように集められるのだろうか。ターナーは、(1)シンボルの外形と観察可能な特徴、(2)現地の儀礼専門家が示す解釈と一般人による説明、(3)人類学者による解釈とのデータの三つのレベルを示している。これは当然のことのように思われるが、実際シンボル釈義の問題を考えてみると、こうした区分が曖昧で、注意の行き届いていないことが多い。その意味で実地調査の過程をはじめとして、つねに意い用いてゆく必要のある重要な指摘といえよう。彼はそのような前提をふまえて、ンカンアと呼ばれるンデンブの成女式の解釈を行なっている。この儀礼に顕著なシンボルはムディの木で、毛布にくるまれた入門者の少女は木の根元に横たわるのである。まずこの木の外形上の性質として、外皮をこするとミルク状の樹液を分泌することがあげられている。次にンデンブの女たちは、この木にいくつかの意味づけを行なう。すなわちまず、この木は儀礼のなかで「長老」のような役割を果たすという。それはターナーの言葉でいえば、儀礼の主要なシンボルということに相当する。そして主要なシンボルとは儀礼の目的達成のための手段にとどまらず、その儀礼の目的と考えられている価値に結びつくものでもある。さらに女たちは、

この木の外見上の性質（ミルク状の樹液の分泌）から、木が母乳や女性の胸を表象するという。それだからこそこの成女式は、初潮の直後ではなく娘の胸がふくらみはじめてから実施されることになっている。成女式の中心的なテーマは母と子の養育にもとづく絆を象徴しており、誕生による結びつきではない。第三にこの木が「母と子」の木であると考えられている。ターナーは、この「母と子」の意味は、母乳を与えて養育することから生ずるいわば生物学的な絆と異なり、家庭内でもそれより広い範囲でもいずれにせよ社会的な関係を示すものであると説明している。ここまでが一般人が主として象徴の外形にもとづいて示す解釈であるとすると、以下は儀礼専門家による解釈である。彼はこの木がリネージの母親に相当し、つまりリネージの祖にあたるという。そしてその祖先が成女式に参加したときにも、やはり彼女は木の根元に横たわっていたのであった。ひき続き彼女の娘も、その娘も、またまた娘もというように連綿と女たちは成女式に参加してきたのである。ということはこの木こそ、ンデンブの慣習がくりかえし実現される場所といえよう。こうした専門家の解釈も、ターナーにいわせると、木の意味は社会の価値や原理を示すものに他ならないということになる。すなわちンデンブ社会の基本原理である母系制を象徴するものである。しかし彼はこの木の意味をさらに展開して、それがンデンブの部族慣習にも言及しているという。その結果母系制の原理とは、ンデンブ社会を形造る個人と集団との相互関係の全体を意味することになる。つまりもっとも抽象的なレベルではムディの木が、ンデンブ社会の統合と持続を示すとターナーは述べている。これに関して彼は、高等教育を受けた一人のンデンブ人が、彼らにとってのムディの木は英国人にとっての英国旗のようなものだと語ったという挿話を紹介している。さて成女式のコンテクストにおいてこの木が示すのは、調和とか統合であるという。また依存関係、つまり母と子の、そしてそれに類比されたンデンブ人と彼らの慣習との関係が強調されている。そのためこの木の意味要素として養育と学習が含まれているといってもよい。それとともにこの木は部族の共通知識および世界観を教示する過程を明らかにするものでもある。すなわち男女の成人式につきものの重要な挿話と一体になって、大人になることはどういうことであるかを彼らに教え伝えてゆく。こうした教示の構造はたいていの通過儀礼にはよくみられ、通過者（入門者）は単に儀礼を経て、ある一つの地位からべつの地位に移行するというだけでなく、新たな来たるべき地位の属性や一人前になるための知識を儀礼の過程で学ぶことが多いのである。成女式の場合、若い娘はやがて自らが果たす母親の役割—保護者、養育者、教授者—を学びとってゆく。この母親のイメージは一般人に対する首長や狩猟儀礼に若者を入門させる呪医などにもあてはめられ、いずれも社会生活における善良で調和のとれた側面を強調するものである。

ところがターナーによると、ムディの木の象徴釈義とそれをめぐる人びとの行動とが齟齬をきたすことがあるという。つまりこれまでの解釈では木が調和性を示すとされてきたが必らずしもそれだけではなく、場合によっては社会を構成するさまざまな単位や集団の

あいだの差違および対立が示されることもあるのだ。すなわち象徴を用いる行動に参加する人びとや集団はなんらかの形で俗なる社会における価値と結びついている。集団という意味では家族、リネージなどがあり、個人のレベルでも男女、若者、老人などそれぞれ異なる単位がみられるとともに、儀礼によって異なったカテゴリーの人間が中心的な位置を占める。成女式はその意味ですぐれて女性のための儀礼であり、しかも若い女性が大人の女性のカテゴリーへと移行する通過儀礼でもある。したがってこの儀礼に登場する象徴は少女が性的に成熟し、妻たる資格を得て、さらに豊かな出産力を備え、母乳のたくさん出る良き母親になることを物語るものである。若い女性＝入門者と大人の女性＝すでに入門した者という対比はあってもこの儀礼は究極的にはンデンブの女性を統一的全体として示すものであり、儀礼の祭に歌われる男を嘲る唄とか、女だけが踊りを行なって男を閉め出すという行動のうちに男女の対立的な姿が映し出される。つまりここでは、木が抽象的なレベルでンデンブ社会の調和を示すのに対し、行為のレベルでの対立（男女の）と具体的なカテゴリーのなかでの調和（女の）が木によって表現されるものといえよう。

さて儀礼の主体となる個人にとっても成女式は他に較べるもののない独特な体験であり、人生のうちでももっとも興奮に満ちた気分になる状況の一つといってまちがいない。その意味でこの木は少女が成熟して新らしい人格を得ることを祝福し、同時にその状況のうちに彼女は独自の存在であることが明示されている。たしかに女性のあいだの調和、そして男とは異なった女性というカテゴリーの全体性がこの儀礼の一つのテーマになっているとはいえ、ターナーは成女式にみられる女性間の対立についても語っている。新たな地位に参入する少女とすでにその移行を経た大人の女性の集団との葛藤もこの木に附随した意味になっているのだ。成女式の一つの局面で、入門する少女が長いあいだの木の根元で横になっている時間はまさに境界状況そのものであり、通過儀礼のコンテストにもとづいてわれわれはそこに停止した時間とか象徴的な死のイメージを思いうかべるといってよい。ンデンブの人びとも、この木の生えている処を「死の場所」ないし「苦の場所」と考えているといわれる。この死との結びつきは、入門する娘とその母親が衣服の切れ端を交換することと、ンデンブ人の葬儀の際に参列者が死者の衣服の一部分をとって身につける行為との相同性からも確認されるとターナーはいっている。成女式における母と娘は、儀礼の終了後は双方とも大人の女性のカテゴリーとして統合されるわけではあるが、あるいは母系という点で両者の調和や繋りが示されているが、儀礼の過程ではそうした調和とともに双方の隔りも強調されることがある。すなわち通過儀礼に典型的な分離の段階では、母―娘というそれまでの関係が一たん切られ、一人の少女（大人になろうとしている）という抽象的な名なしの存在が、個人の母として特定されぬ全体の母（ンデンブの大人の女性）の手によって新らしい地位に移行させられ、同時にその地位に必要なさまざまの知識を与えられるといえよう。ここでもまたムディの木が象徴するものは調和であったり対立で

あったりという矛盾がみられるのである。このような矛盾はむしろ象徴に本来的に備わった属性であり、それをシンボル解釈のデータの源泉の区分や、抽象的、思弁的なレベルでの象徴の意味と実際的な行為を通じて示される意味との対比を示すものと位置づけたターナーの象徴観は並々ならぬ説得力を示している。それとともにサイン：既知のものを類似性と省略によって示す表現方法、シンボル：見当のつかぬものを適確に示してしまう表現方法というターナーの区分も、ンデンブ社会の状況のもとで意味をもつように思われる。

ンデンブ人の成女儀礼に示されたムディの木にまつわる多義性を通じてターナーは象徴の問題を具体的かつ明確に論じているといってよいが、その展開として儀礼シンボルの特徴として以下の三つの性質をあげている。(1)凝縮化(2)多義性(3)意味の分極化がそれにあたる。(1)は一つのシンボルという形がさまざまな事物や行為を一まとめに表象することであり、(2)はそれと関連して、一つの意味するもののなかに数多くの意味されるものが含まれていることをいう。ムディの木の場合にそれが示すのは、女性の胸、母性、成女式の主体、母系原理、特定の（儀礼の主体が所属する）母系リネージ、習得、ンデンブ女性の統一、ンデンブ社会の調和などであり、その全体を通じて養育と依存の関係が象徴されているとターナーは述べている。(3)はンデンブ社会にみられる主要な儀礼シンボルには、一方では道徳、社会秩序、社会組織、共同体、規範、価値といった思弁的、理念的な意味の極があり、他方自然や身体と結びつく感覚的な意味の極が存在するという、意味の分極化のことを指す。後者の場合、象徴の意味内容はその外形と分かち難く結びついており、ムディの木から分泌される樹液と母乳というような連想がその証左の一例である。

ターナーはサピアのシンボル分類に言及して、(1)言及的シンボル：言語による発話、書くこと、国旗など、何ものかに言及し、指示する目的をもつ要約的な表現方法、(2)凝縮されたシンボル：意識、無意識を問わず感情のハケ口を用意する、直接的な表現のための凝縮された方法、の区分を紹介している。そして(2)の場合には無意識の深層がより明らかにされ、感情的な側面が行為の類型や状況のなかで拡大され、象徴に備わった理念的、規範的な意味とは異なる意味が示されると述べている。こうした点を考えると、儀礼に表現される主要な象徴は、成女式のムディの木のように、社会に備わった倫理的、法的な規範と感情とを出会わせるものといえよう。いや儀礼そのものがそうした作用を行なうもので、社会的存在がもつ基本的欲求（狩猟、農耕、出産力、良い天候など）と社会生活の基盤をなす共通価値（互恵性、仲間意識、親族関係、もてなしなど）のいずれとも関わっている。およそ人間は儀礼シンボルを用いて、社会的現実や自然の現実に対処してゆくという見解がターナーの立場をはっきりと示している。

さてこれまでのささやかな検討では「象徴の森」に迷い込んで、森を見るどころか木の葉一枚を眺めたようなもので、しかもターナー象徴論の枠組のなかで主要なシンボルとしての役割を担う彼の用語群、すなわち構造と反構造、境界性、反省作用、ルート・パラ

ダイム、リミノイドなどの問題にはまったく触れていない。また象徴と解釈の問題にきわめて反詩的なやり方ではあるが、批判的検討を加えたスペルベルの提起した点にも言及していないという不行届きが存在している。　本稿はただ彼の象徴論の出発点を示すといえる、ンデンブ人の成女式に認められるムディの木の象徴性についてターナーに倣って後付けたにとどまる。象徴の案内人ターナーの詳細な記述にはいささかのいらだちを覚えることもあるが、それを通り越さないと、ンデンブ人の象徴世界には入り難いという点も事実であり、ともかくムディの木という儀礼シンボルにまつわる性質を通して、象徴が具体的なものとして知覚されうるという点に注目することで研究ノートの書出しとしておきたい。

文献

V. Turner 1967 "The Forest of Symbols" Cornell University

———、1969 "The Ritual Process-Structure and Anti-Structure" Aldine Publishing Co.
〔富倉訳『儀礼の過程』思索社昭和51年。〕

———、1974 "Dramas, Fields, and Metaphors—Symbolic Action in Human Society" Cornell University

———、1975 'Symbolic Studies' in "Annual Review of Anthropology" Annual Review Inc.

———、青木保、一九七八、対談「宗教・日本・人類学」『展望』7月号所収